

平成を自由と奉仕の世紀に

八千代 鈴木 憲輔

ロータリーの根本精神が、「超我の奉仕」であることは、私どもロータリアンならば、だれでも知っているところであろう。しかし、この「超我」の我は、時に個人的な自我であり、また時に家庭、あるいは地域、そして事業的な自我でもありうる。この中でもっとも中心的なもののは、事業的的自我ではなからうか。それは、ロータリークラブが経営者の団体であり、また綱領における四大奉仕が、有益な「事業」の基礎としてあることから、明らかであろう。これ

まで、あまりいわれなかったが、ロータリアンにとって自由とは、この超我の奉仕そのものにほかならない。

いまや世界は、第二次大戦後最大の変動期にある。それは、個人の自由と創意を前提とする民主主義の真価が、歴史的に実証され、国家における一党独裁制が、崩れつつある現象にほかならない。このことは、国家以外の組織においても、まったく同様であろう。つまり、末端を構成する個人と、それを管理する側との間が、ただ一方的であって、情報の相互循環のない組織は、いつかは官僚的になり、肥大化され、ついには形骸化して、崩壊に至るのである。これに反して、個人の自由と創意がもっとも尊重される組織、民主的な組織は、みずから活性化されて、発展するのである。

つまるところ、超我の奉仕は、決して一律ではあり得ないということである。たとえば、先進国と中進国との間には、その規準と行動において、おのずから異なるもののあることは、当然である。今やわが国は、貿易黒字においても世界第一位になった。わが国が自由主義国家群の一員として、大きな責任を負うことになったということがある。つまり、私どもは、いつの日かかならず実現される世界共同体の実現に、世界的な観点から奉仕すべき立場になった。

かつて、ロータリーは、社会の中の小さな組織でもよかった。それはまた、ときには、外からは理解しにくい、特殊な言葉を使う閉鎖的な

団体であってもよかったのかもしれない。しかし、このロータリーの理想が、完全にわが国の国是に合致するに至った今、私どもは、もっと社会に開かれたロータリーとなり、誇りをもって国民とともに歩む覚悟をすべきではなからうか。そして、全世界の人間の幸せのために、それぞれの実業的自我をも超えて、「平成を自由と奉仕の世紀に」するべく、こん身の情熱を傾けるべきではないだろうか。読者諸子のご賛同を得ることができれば、まことに幸いである。

(第二七九地区 千葉県 内科医)